

「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」

vol.1 「青短の源流を訪ねて」

青山学院女子短期大学では、70周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」を2019年度から2020年度にかけて、4回にわたって開催いたします。第1回は「青短の源流を訪ねて」として、次の内容の展示を行います。貴重な資料が多数展示されますので、どうぞご覧ください。

- I. 青山学院の女子教育の黎明期
- II. 手芸学校の挑戦
- III. 女子教育の拡大
- IV. 戦争と青山学院の女子教育



海岸女学校集合写真 (1891年頃)



女子小学校最初の生徒



関東大震災後のテント校舎



青山学院高等女学部制服 (1938~1941年着用)



鷲の刺繍画  
(青山学院高等女学部生徒作品 1928年)

会期：2019年 5月24日(金)～6月15日(土)  
10:00～17:00 (月～金)  
10:00～15:00 (土) ※日曜日は閉廊

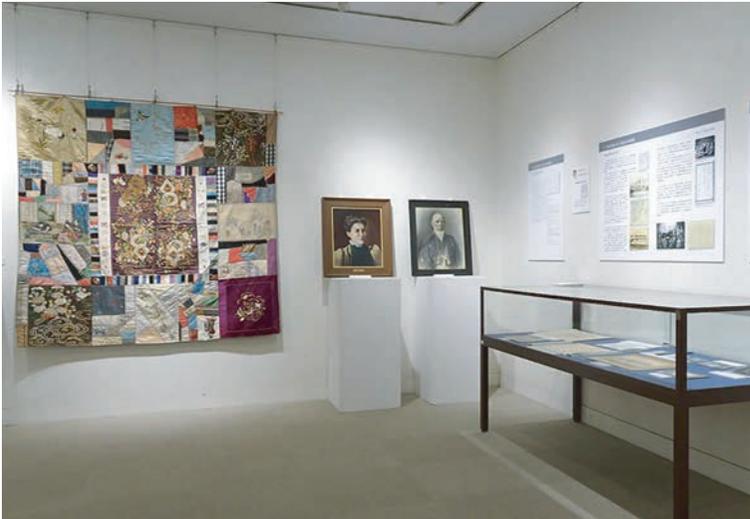
会場：短大ギャラリー (N館1階礼拝堂隣り)

ギャラリートークのご案内

本展を企画した研究プロジェクトのメンバーによる展示解説が行われます。予約不要ですので、直接ギャラリーにお越しください。

5月29日(水) 12:50～13:10 小林 瑞乃 先生 (現代教養学科日本専攻准教授)  
6月 6日(木) 12:50～13:10 齋藤 元子 先生 (現代教養学科講師)

主 催：青山学院女子短期大学  
企画主体：総合文化研究所研究プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」  
運営主体：新研究所準備委員会 (総合文化研究所)  
協 力：青山学院資料センター・短大同窓会・広報企画委員会



vol.1 「青短の源流を訪ねて」

会期：2019.5.24-6.15

会場：短大ギャラリー

青山学院女子短期大学 70 周年記念ギャラリー展  
「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」  
vol.1 「青短の源流を訪ねて」

ごあいさつ

青山学院女子短期大学総合文化研究所所長 鈴木直子

1950年に開学した青山学院女子短期大学は2020年に開学70周年を迎えます。それを記念し、2019年度・2020年度にかけて連続ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」を行うことになりました。

今回はその第1回目となり、1874年のスクーンメーカー先生による女子小学校開学から戦時下まで、「青短の源流」と言える時代を訪ねます。I. 青山学院の女子教育の黎明期、II. 手芸学校の挑戦、III. 女子教育の拡大、IV. 戦争と青山学院の女子教育、という4部構成で展示を組み立ててみました。

この連続ギャラリー展は、本学の総合文化研究所の2019-20年度研究プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」グループが企画し、新研究所準備委員会が運営主体となって進めております。これまでの青短の軌跡を振り返るとともに、青山学院の女子教育の意義を再確認し、青短から学院大学へと引き継ぐべき精神を確認する機会になることと自負しております。

今回、キャプションのチェックのほか注目コメントも書いてくださった傳農和子様はじめ青山学院資料センターの多大なるご協力により、短大開学以前の多彩な写真や、手芸学校の生徒たちの素晴らしい作品、貴重なセーラー服などをお借りすることができました。間近で青山学院の女子教育の歴史を感じることができるとともに、貴重な機会になっているかと思えます。資料センターの皆様、ご協力いただいた青山学院女子短期大学同窓会および青山学院校友会の皆様、また展示コンセプトづくりやパネル執筆に関わってくださった本学講師の齋藤元子先生など、お力添えいただきました多くの皆様に、深く感謝申し上げます。

vol.2 「青山学院女子短期大学の誕生と発展」(仮)は今秋、青山祭の時期(10/28(月)～11/22(金))を予定しております。ぜひ合わせてご覧くださいませよう、再訪をお待ちしております。

# I 青山学院の女子教育の黎明期

## 女性海外伝道運動と女性宣教師 —なぜスクーンメーカーは日本に来たのか？—

齋藤 元子 (現代教養学科 講師)

アメリカでは、南北戦争 (1861–65 年) の後、アジアやアフリカの異教地に女性宣教師を派遣する海外伝道運動が、女性たちの間に広まった。この運動は、南北戦争下、志願兵の家族支援、コミュニティの環境保全、戦場へ送る医療物資の調達といった活動を、女性たちが教会を基点として組織的に遂行した成功体験から、新たな活動を模索する中で生まれたものである。教師や看護師の資格を有する若い独身女性教会員をリクルートし、それぞれの異教地の状況にふさわしい人材を女性宣教師として派遣する。そして、教育あるいは医療活動を通じてキリスト教伝道を実践することを目的とした。

主要なプロテスタント教会は、女性海外伝道協会を組織し、複数の協会が誕生した。その中でも、スクーンメーカーを日本に送り出したメソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、最大の会員数を擁し、資金調達、女性宣教師の採用人事、事務処理、広報活動などの手腕においても突出していた。

当時の日本は、明治政府により文部省が設置され、学制が公布されて男女の別なく初等義務教育が推進されていた。しかし、中等教育以上においては、男女別学が規定される。そして、

政府は男子中高等教育の整備を漸次進めていき、女子をそこから締め出した。この状況を知ったメソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、日本に女性宣教師を派遣する決断をする。最初的女性宣教師として選ばれたのが、スクーンメーカーであった。イリノイ州のハイスクールで3年間校長を務め、十分な教師経験を積んでいたスクーンメーカーは、女子教育とキリスト教伝道に献身するという決意を携え、5年間の期限を自らに課して、アメリカを発った。

1874 (明治7) 年10月28日に日本へ到着したスクーンメーカーは、津田仙の尽力を得て、早くも11月16日に麻布本村町の岡田邸に女子小学校を開校した。津田仙は、1871 (明治4) 年日本人初の女子留学生として渡米した5人の少女の1人津田梅子の父であり、東京で最初にメソジスト監督派教会の信者となった人物でもある。1875 (明治8) 年6月17日には、岡田邸の売却に伴い、近くの薬師堂 (現南麻布三丁目) に移った。ここは空寺で、津田仙が経営する津田繩の製造工場として使用されていたところであった。



Dora E. Schoonmaker (1851-1934)



GROUP OF FIRST STUDENTS

「女子小学校」最初の生徒たち  
左から小崎千代 (旧姓:岩村)、岩崎常子 (旧姓:新井)?、津田初、津田次郎?、上野琴子 (旧姓:津田)  
(『TAOYAMA JO GAKUIN』 by Nell Margaret Daniel, 1901年掲載  
撮影年 1899 (明治 32) 年頃 (創立 25 周年記念の頃の撮影か?)



麻布界限の地図(『しなやかに夢を生きる』榎村恵子著より)



女子小学校が教室として借りた薬師堂



薬師堂/薬草図の画かれた天井画

同年 11 月には、津田仙の斡旋で、三田北寺町(現三田四丁目)の大聖院の一部を借り受けることに成功した。ここで新たに救世学校と校名を掲げる。それまで築地居留地から人力車で通勤をしていたスクーンメーカーは、生徒と寝食をともにできることとなった。念願の寄宿制学校のスタートである。救世学校の生徒の中には、のちに日本における女性新聞記者の草分けとなり、足尾鉍毒問題の惨状を鋭く報じた松本えいがいた。



大聖院内部



大聖院入り口

# I 青山学院の女子教育の黎明期

## 築地居留地の海岸女学校

齋藤 元子（現代教養学科 講師）

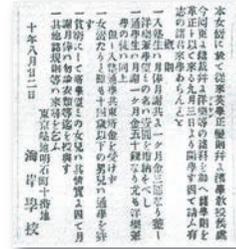
女子小学校、救世学校を経て、1876（明治9）年12月、築地居留地十番に初めて自前の校舎が完成し、翌月の1877（明治10）年1月、校主津田仙、校長スクーンメーカー、前年に来日したホワイティングと数名の日本人教師によって、救世学校から校名を改め、海岸女学校が誕生した。

校舎は、2階建ての2棟からなり、1棟は隅田川、もう1棟は鉄砲洲川に面し、長い廊下で結ばれていた。隅田川寄りの校舎は、張り出し窓と蔭の絡まる玄関をもち、食堂、居間、2つの教室、スクーンメーカー校長とホワイティングの部屋、上級生の寄宿室があった。もう一方の校舎には、生徒の食堂、教室、1878（明治11）年に来日したホルブルックとスペンサーの部屋、下級生の寄宿室があり、天気の良い日には富士山を眺望することができた。

1879（明治12）年12月26日、日本橋より発生した火災により、校舎は全焼してしまう。校舎再建までの期間、米国公使ビンガムの計らいにより、政府の許可を得て、居留地外の銀座三十間堀（現銀座三丁目）にあった原女学校（江戸町方与力出身でキリスト教社会事業家の原胤昭が明治9年に設立した女学校）の旧校舎を借り受け、急場をしのいだ。この時、スクーンメーカーはすでに帰国し、ホワイティングとホルブルックとスペンサーの3名が再建にあった。スクーンメーカーは火災の報を受け、海岸女学校復興の募金を得るために、アメリカ各地を奔走した。

1881（明治14）年9月、火災で焼失した校舎の北側に位置する十三番に新校舎が完成する。全長127フィート（約38メートル）、奥行き51フィート（約15メートル）の2階建てであった。南側の2箇所には入り口があり、北側は3箇所の渡り廊下で使用人の宿舎と接続していた。各階とも南側は長いベランダが延びていた。1階には、大教室、4つの小教室、生徒の食堂、受付、客間、食堂、予備の寝室、物置、クロゼット、2階には、4つの寝室と寄宿生室があった。

教室は畳の上に机と椅子が置かれていた。生徒の



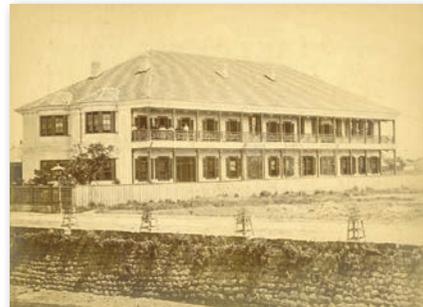
海岸女学校生徒募集広告  
1877（明治10）年 朝野新聞



最初の海岸女学校校舎・牧師館 築地明石町10番



築地居留地地図 矢印の地点が海岸女学校のあった明石町10番、13番



再建された海岸女学校校舎 築地明石町13番

食堂も畳敷きで、生徒は座布団に座り、箸を使って食事をした。ナイフやフォークを使った食事スタイルを採用することも可能であったが、生活習慣の西洋化を生徒たちに強いるのは望ましくないと考えたのである。

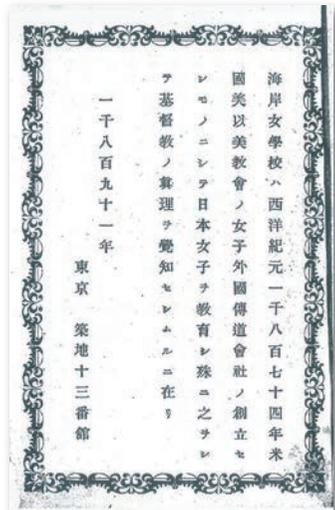
寄宿生室は 50 名以上の生徒が収容可能な広さであった。1 部屋を 2 名で使用し、各部屋の間仕切りは 6 フィート（約 160 センチメートル）と低く作られていた。それは全室に十分な採光と換気を行き渡らせるための配慮であった。床は畳敷きで、家具は配置せず、押入れに枕と布団を収納した。焼け跡の十番は、運動場として使用した。北側の隣接地とはレンガの塀を設け、過去の教訓から、冬の強風による火災に対して防御を施した。

46 名の生徒からスタートした海岸女学校は、1886（明治 19）年には、生徒数が 160 名と大幅に増加し、校舎は次第に手狭となる。そして 1888（明治 21）年 9 月尋常小学校・高等小学校課程を、海岸女学校として築地居留地に残し、女学校課程以上は青山に移転して、東京英和女学校と名乗るようになる。

1894（明治 27）年 6 月、地震により居留地の校舎は全壊する。海岸女学校は東京英和女学校と再び統合され、青山において青山女学院として新たな道を歩むこととなった。6 月 30 日閉校式を挙行政し、築地居留地での 17 年半の歴史に幕を閉じた。



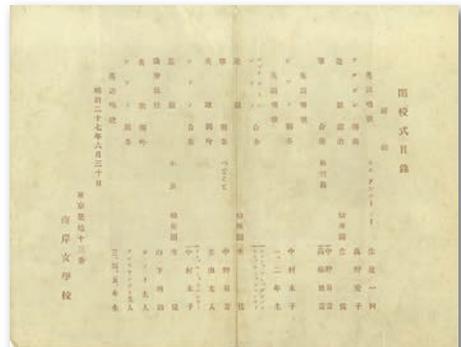
海岸女学校生徒 1882（明治 15）年



海岸女学校設立の目的  
「海岸女学校規則」より抜粋 1891（明治 24）年



海岸女学校集合写真 1891（明治 24）年



海岸女学校閉校式日録 1894（明治 27）年

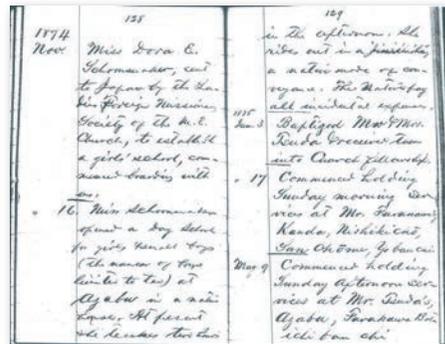
# I 青山学院の女子教育の黎明期

## 女子小学校開校に関する資料

齋藤 元子 (現代教養学科 講師)



スクーンメーカーが Heathen Woman's Friend 誌に  
学校を 11 月 16 日に開校することを報告している記事



Julius Soper の日記抜粋 1874 (明治 7) 年 11 月

Record  
"Private Journal" of Julius Soper A. M.  
Principal of West Street Academy

抜粋  
p. 67 (pp.128, 129)  
1874  
Nov.

Miss Dora E. Schoonmaker sent to Japan by the Ladies Foreign Missionary Society of the M. E. Church, to establish a girl's school, commenced boarding with us.

Nov. 16  
Miss Schoonmaker opened a Day School for girls and small boys (the number of boys limited to ten) at Azabu in a native house. At present she teaches two hours in the afternoon. She rides out in "jinrikisha", a native mode of conveyance. The natives pay all incidental expenses.

1875  
Jan. 3  
Baptized Mr. and Mrs. Tsuda and received them into Church fellowship.

Jan. 17  
Commenced holding Sunday morning services at Mr. Furukawa's Kanda, Nishikichō, San chōme, Yo ban chi.

Mar. 9  
Commenced holding Sunday afternoon services at Mr. Tsuda's, Azabu, Furukawa Bata ichiban chi.

【和訳】  
p. 67 (原文 pp.128, 129)  
1874年11月  
メソジスト 基督教会 婦人 海外伝道局 (The Ladies Foreign Missionary Society) により日本に派遣されたドーラ・スクーンメーカー女史 (Dora Schoonmaker) が私たちの家に寄宿を始めた。

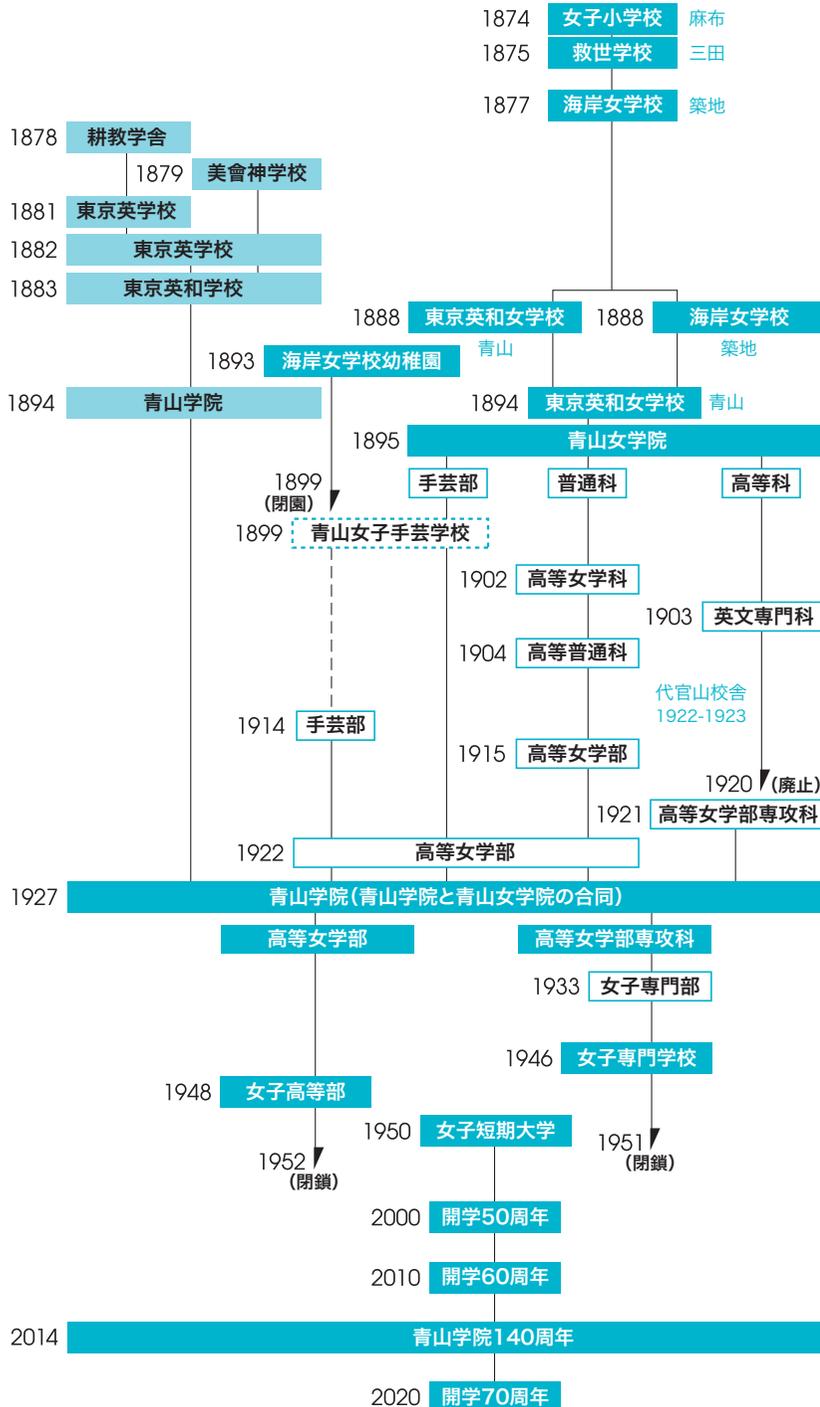
11月16日  
スクーンメーカー女史が少女と幼い少年のために麻布の日本人の家で昼間学校を始めた (少年は 10 人に限定された)。現在彼女は午後2時間教えている。彼女は地元の運搬方法である人力車に乗っている。日本人が全ての雑費を支払っている。

1875年  
1月3日  
津田夫妻を洗礼し、教会の仲間として受け入れた。

1月17日  
神田錦町3丁目4番地のフルカワ氏の家で、日曜の朝の礼拝を始めた。

3月9日  
麻布フルカワバタ1番地にある津田氏の家で、日曜の午後の礼拝を始めた。

# 女子小学校開校から敗戦まで



1874年11月16日 開校  
 1875年 救世学校と改称  
 1876年 校舎建設  
 1877年 海岸女学校と改称  
 1879年12月26日 校舎全焼  
 1881年 校舎再建  
 1888年 東京英和女学校開校  
 校舎建設  
 1890年 海岸女学校の中に  
 手芸教室を開く  
 1891年 東京英和女学校の  
 中の職業部とする  
 1893年 海岸女学校幼稚園開園  
 東京英和女学校職業部  
 校舎 (ハリソン記念館)  
 建設  
 1894年 東京大地震により  
 海岸女学校閉校  
 東京英和女学校  
 (青山)へ合同  
 1895年 青山女学院と改称  
 1899年 幼稚園閉鎖  
 手芸部青山女学院  
 から一時離脱  
 1914年 スプロールズ就任  
 手芸学校、  
 青山女学院へ再合同  
 1915年 「青山女学院憲法」  
 制定  
 1920年 英文専科本科廃止  
 1922年 代官山校舎一部完成  
 1923年 関東大震災  
 代官山校舎全壊  
 1927年 青山学院との合同  
 1945年 空襲、敗戦

# IV 戦争と青山学院の女子教育

## 日本女性の自立を求めて－青山女子手芸学校の挑戦－

小林 瑞乃（現代教養学科日本専攻 准教授）

現在では知る人も少ない「青山女子手芸学校」であるが、青山学院の女子教育の伝統において無視できない存在である。ここでは、その理念と実践とを振り返っておきたい。

その創設には二人の女性、フローラ・ハリスとエラ・ブラックストックの尽力があった。特にブラックストックは手芸学校の任務を一手に引き受け、日本女性の育成を自己の使命として生涯を捧げることになる。



フローラ・ハリス (1850-1909)

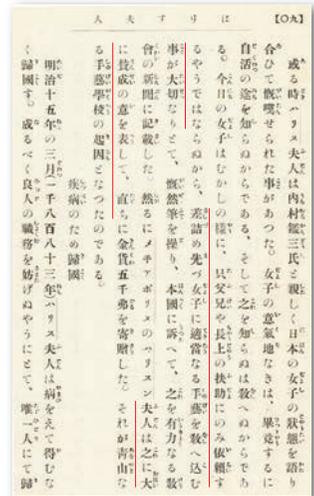


エラ・ブラックストック (1842-1916)

1873 (明治6)年にメソジスト監督派教会が日本宣教を開始した初代宣教師の一人であるハリスの妻フローラは夫とともに北海道に渡り遺愛女学校 (函館) を創立した人物で、日本語に精通し日本文化を理解し、日本社会をめぐる論考を多数執筆している。特に当時の日本女性の地位の低さに驚き、自立の必要性を痛感した。「日本のような家族制度の中で、女性達の社会的地位を向上させるためには、彼女達の手技術をもたせ、自活の道を開かせることがぜひ重要である」。この思いをアメリカに書簡で送り、講演や新聞雑誌に訴え、職業婦人養成のためのホーム建設への熱心な運動の結果、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会が日本に派遣したのがブラックストック宣教師であった。

ブラックストックは1889 (明治22)年12月に来日して海岸女学校に着任し、翌1890年3月に海岸女学校の一室に手芸教室を開設した。初代生徒は、岡本ふみと宮川りうの2名であった。1891年に東京英和女学校と合併して「東京英和女学校職業部」となり、カリキュラムは和洋裁縫・西洋飾縫・日本刺繡・製図・英語・聖書その他国語など普通教養科目を課した。

軌道に乗った1893 (明治26)年には校舎を新築し (ハリソン記念館)、「東京英和女学校手芸部」と改称した。この記念館は華麗な西洋館として親しまれ、1923 (大正12)年の関東大震災まで手芸部の校舎として使用された。また、これを機に新たに学科課程を整え、普通部と専門部を設置し、専門部には裁縫科・刺繡科・彫刻科・活花女礼茶道



青山学院女子職業教育ができるきっかけとなったハリス夫人の訴え (『はりす夫人』山鹿旗之進 編 p90より)



東京英和女学校職業部校舎 (ハリソン記念館) 1893 (明治26)年12月16日竣工

科の四科を設けた。

授業科目には裁縫・編物・刺繍・飾縫・茶湯・活花・図案・  
絵画・彫刻・女礼・倫理・聖書・料理・家政・簿記・国語・算術・  
英語・習字などがおかれ、全国の手芸専門学校の水準をは  
るかに超え、当時として技術的教養的にレベルの高い教育  
を志向していたのであった。

生徒の作品は精巧で優れたものが多く、そのほとんどが  
外国人に購入され、制作中に売約済みとなるものや多くの  
注文を受けたのであった。当時の新聞では、手芸部では女  
学生が「自営自活の道」を立てるための教育を施し、殊に「女  
子に象牙彫刻を教授するは同校を以て嚆矢となす」（『読売  
新聞』1894（明治27）年2月28日）と報じている。

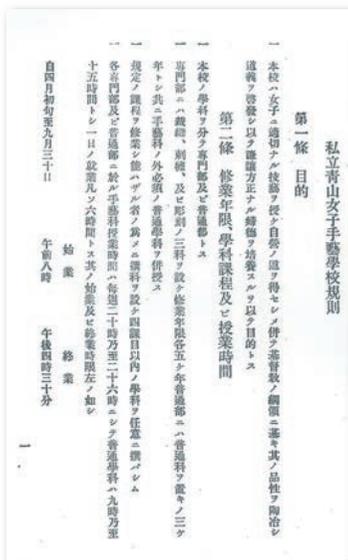
1899（明治32）年、文部省訓令第十二号によって各種学  
校となり、「青山女子手芸学校」として独立した（1914年  
再び合併し「青山女学院手芸部」となる）。手芸学校の世評は高く、  
上流階級や地方の名士の子女も入学した。1901（明治34）  
年日本女子美術協会第一回美術工芸展の出品作品において  
も本校の作品は好評であった。

こうして「学校の名声は上り卒業生は高給で諸学校・諸  
機関に就職し、入学志願者全員の収容は不可能となり、競  
争率激化、生徒の資質、教育内容も一段と向上した」（氣賀  
健生『青山学院の歴史を支えた人々』学校法人青山学院、2014年、  
258頁）。

手芸学校における女性の自活自立のための技術・教養教  
育は、日本の女子教育において独自の位置を占めていると  
言えるのである。



手芸学校授業風景 刺繍（上）彫刻（下）



青山女子手芸学校規則 1899（明32）年



青山女子手芸学校教職員 撮影年不詳／ブラックストック、本多貞子（本多庸一之妻）、岩村透ほか

## II 手芸学校の挑戦

### 刺繍作品を鑑賞して

阿久津 光子 (子ども学科 教授)

1887 (明治 20) 年「パッチワーク作品 寄裂」、1893 (明治 26) 年「刺繍作品 Love Conquers All」、1928 (昭和 3) 年「鶯の刺繍画」。実在するモノはそれをつくった人の手と息づかい、その存在を感じることができます。貴重な資料である展示品の手芸作品 3 点についてみていきましょう。

「パッチワーク作品 寄裂」は 161×164 cm の大きなタペストリーですが、当時青山キャンパスにおいて教育に尽力した J.O. スペンサー宣教師 (1857-1947) に生徒たちが贈った品で、子孫に受け継がれ 116 年の時を経て 2003 年に学院に寄贈されました。

華麗な刺繍を施した帯や着物の裂、風景描写された日本画 (絹本)、緋、縞や格子など織物、型染め、更紗、友禅など染物、「79.」とプリントされた裂もあります。また「押し絵」と呼ばれる柄を立体的に表現する技法 (厚紙で形を作って美しい布でくるみ、中に綿を詰めて板に貼り付ける) でつくられた小鳥や猫などが付けられたり、アルファベットの刺繍など、大小さまざまな絹の裂を繋ぎ合わせて一枚の作品にまとめられています。西洋刺繍のチェーンステッチやバックステッチなどと、裁縫の縫い目の「千鳥がけ」で裂の繋ぎ目に色遊びを施していたり、その魅力的なディテールから、生徒たちが楽しんで制作していたことが感じ取れます。

※『J.O. スペンサー師寄裂 修理報告』として詳細がまとめられています。(2004 年、編集：青山学院資料センター、発行：青山学院)

「刺繍作品 Love Conquers All」は、太い金糸を生地の上に英文字の形に添わせて折り返し、細い留め糸で縫いつける技法「駒縫い」で描かれています。敷き詰められた金糸が立体的で金色が豪華に浮き上がります。「Love Conquers All」は「愛はすべてに勝つ」と訳せますが、メッセージ文字の間に可憐な草花が刺繍されていることで、その言葉に優しさを添えています。



パッチワーク作品 寄裂 1887 (明治 20) 年



パッチワーク作品 寄裂  
ディテール



刺繍作品 (Love Conquers All) 1893 (明治 26) 年

す。山下太郎のラテン語入門 (<https://www.kitashirakawa.jp/taro/?p=1385>) によりますと、ウェルギリウスの詩に出てくる言葉「Omnia vincit Amor.」の英訳で、原文では「理性的な人間も愛の力に抵抗することはできない」という意味で使われているそうです。愛をもってどんな苦難も乗り越えるというメッセージの他に、恋する人間の気持ちも込められていたのかもしれないと想像することもできますが、この刺繍作品の凛とした佇まいから、やはり聖書へと通じる言葉と受け止められます。

「鷲の刺繍画」をみますと、まずその技術力の高さに驚きますが、布地に描かれた下絵の線が残っているのには思わず微笑んでしまいます。曲がりくねった松の幹と枝に留まる鷲が、強調された光と影により写実的に糸で描かれています。鷲の羽根の重なり、グラデーションと陰影表現により、一針一針刺された絹糸の光沢と立体感が魅力的です。松の幹や葉の表現も刺し方でその質感が表現され、力強い作品です。

日本の刺繍は飛鳥時代に始まり、固い繕り糸を刺して形を表していました。奈良中期以降に繕りの少ない甘繕りの糸で平繡（形の中を糸を平行に刺して平らな色面をつくる）を主にした技法が現れ、光沢のある柔らかな表現の情緒性が好まれたことで、以降日本刺繍の基本的繡法になったそうです。この日本刺繍の光沢のある甘繕り糸の効果と、明治期からの西洋絵画への関心による写実的表現が組み合わされた作品だと感じました。

手芸学校授業風景の写真をみますと、刺繍をしている女生徒の脇に鶏の剥製が置かれています。写実的なデッサンをふまえて刺繍にその表現を取り入れていたのだと理解できました。

どの作品からも、その時代と共に、それを手がけた女子学生たちが、一針一針思いを込めて布に刺して制作していた姿を想像することができ、時を超えて共感できる幸せを感じました。モノにはそういう力があると思います。



鷲の刺繍画 1928（昭和3）年



手芸学校授業風景 刺繍

### Ⅲ 女子教育の拡大

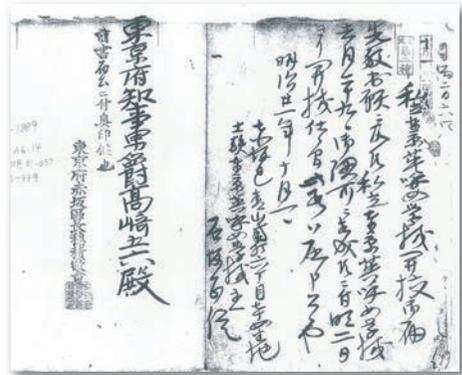
#### 東京英和女学校の教育内容と使用教科書

齋藤 元子 (現代教養学科 講師)

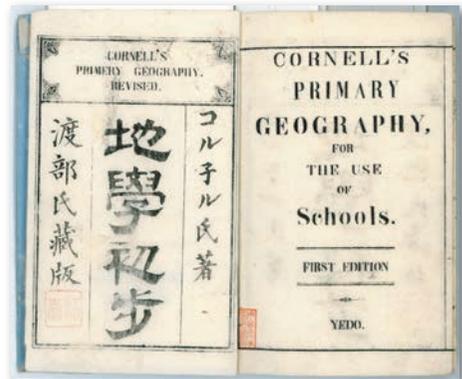
海岸女学校は居留地内に設立されたため、開校届など公式の書類を政府に提出する必要がなかった。しかし、1888 (明治 21) 年女学校部門を東京英和女学校と改名し、青山に移転させるにあたり、初めて東京府に「私立学校設置御許可願」が提出されている。それに添付された課程表や教科書用図書表から、その教育内容をうかがい知ることができる。

課程表に示された課目は、英語・和漢学・数学・地理・歴史・天文・博物・動物・植物・地質・物理・化学・生理・衛生・倫理・心理・経済・政治・教育・画法・音楽・聖書・裁縫・割烹・作法であった。

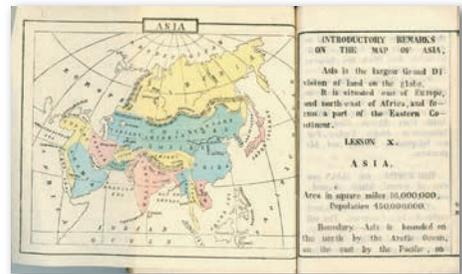
使用された教科書は、和漢学関係を除いて、大半がアメリカの教科書であった。つまり、様々な教科を英語で学んだのである。例えば、地理の教科書は、当時のアメリカで最も普及していたコーネルの地理書が用いられた。この教科書は、福沢諭吉が幕末に渡米した折に、ニューヨークで大量に買い求めた書籍の一つであり、慶応義塾においても使用された。また、多数の官立男子中等学校でも用いられていたとの記録がある。つまり、東京英和女学校の教育内容は、慶応義塾をはじめとする男子中等学校と比べても、遜色のないものであった。キリスト教系女学校への強い対抗意識を持って設立された一仏教系女学校では、読書・算術・手芸・修身・図画・生花・点茶が教授科目であった。この比較からも、東京英和女学校の教育水準の高さを知ることができる。



東京英和女学校開校届 1888 (明治 21) 年



Cornell's Primary Geography 中表紙



Cornell's Primary Geography :5丁

海岸女学校ならびに東京英和女学校は、19 世紀アメリカに発展した女子中等教育機関であるフィーメール・セミナリー (female seminary) をモデルとしていた。フィーメール・セミナリーの目標は、敬虔にして教養高い家庭婦人の育成、女性教師と女性宣教師の養成であった。

フィーメール・セミナリーの教育内容は、それまでの女子中等教育が一部の富裕層子女を対象とした結婚に備えての教育に止まっていたのに対して、一般教養の重視であった。特に地理、物理、化学、天文といった科学諸科目が、カリキュラムの中核を占めていたことが特徴である。

東京英和女学校の教授科目も、地理・物理・化学・天文・博物・動物・植物・地質といった科学系の諸科目が多数含まれていた。科学系科目の重視というフィーメール・セミナリーの特徴は、東京英和女学校においても十分に発揮されていたことになる。

フィーメール・セミナリーでは、地理という教科を「最初に学ぶべき科学」と位置付けていた。東京府に提出された東京英和女学校の「通年学科課程表」を見ると、地理は一年生の初学期に配置されている。この事実は、フィーメール・セミナリーの精神が東京英和女学校へと受け継がれていることを物語っていると言えよう。

東京英和女学校の設立母体であるメソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、女性宣教師になるための資格として教師経験を重視した。その結果、日本に派遣された女性宣教師は、いずれも教師の経験を有していた。そして、その多くがフィーメール・セミナリーの卒業生であった。彼女たちは、自らが受けた教育を日本の地において実現しようと志したのである。



「東京英和女学校職業部本科卒業の際に写す」  
1893（明治26）年6月



東京英和女学校1校舎 1888（明治21）年



東京英和女学校2校舎 1888（明治21）年



体操の授業（合同メソジスト教会資料館所蔵写真）撮影年不明



料理の授業（合同メソジスト教会資料館所蔵写真）撮影年不明

### Ⅲ 女子教育の拡大

#### 高等女学校令と女学生たちの少女文化

鈴木 直子（現代教養学科日本専攻 教授）

諸外国から後進国と見られることを恐れた開国直後の日本にとって、女子教育は重要な論点の一つだった。アメリカのオーバーリン大学は早くも 1833 年に女性に高等教育の門を開く。1870 年代には福沢諭吉ら明六社の人々が女子教育の必要性を説き、1880 年代には岸田湘煙や福田英子といった女弁士たちが自由民権運動に参加するなど、男女平等の機運が高まる。

しかし結局、明治日本が出した結論は「男女平等」ではなかった。それが決定的になったのは 1899 (明治 32) 年の「高等女学校令」である。現在の女子中学・高校にあたる「高等女学校」は、男子の行く (旧制) 中学とは異なり、国語・外国語・歴史など一般教養に加え「家事」「裁縫」などがカリキュラムとして課されることとなった。こうして、男女の役割を明確に分け、女性を「良妻賢母」として位置付けるジェンダー秩序が出来上がっていった。

高等女学校令に先駆け、青山学院には 1895 年、幼稚園から高等教育まで女子の一貫教育を目指す「青山女学院」が誕生した。現在の大学に相当する高等教育にも力を入れ、1902 (明治 35) 年に英文専門科を設立 (女子高等教育機関という意味では青短の直接の祖先にあたる)、専門学校令 (1903) で認められた日本で最初期の私立の女子高等教育機関となった。

高等女学校への進学率は、大正期で 5-10% 程度、昭和初期で 15% ほど。青山の女学生も比較的恵まれた階層の子女が多かったと思われる。青山の教育は、他の東京私立女学校と比べ、英語・国語・数学・地歴などの教科に多くの時間が割かれ、裁縫・体操が少なく、当時の良妻賢母主義からはやや逸脱した傾向にある (青山さゆり会発行『青山女学院史』(1973) 396 頁)。文化祭や学芸会に当たる「文学会」は明治中ごろから行われ (前掲 215 頁)、創立記念日には音楽会や劇を楽しんでいた (前掲 418 頁)。

生徒たちの服装は、明治期の着物から、大正期にはきりっと結んだ東髪に袴と白足袋の女学



海岸女学校幼稚園園児  
幼稚園開園 1893 (明治 26) 年、閉鎖 1899 (明治 32) 年



青山女学院生徒 1905 (明治 38) 年 2 月 8 日

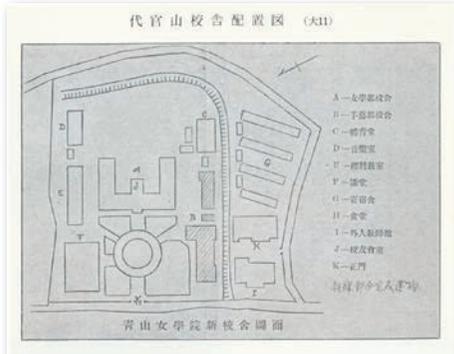


クランドン館 1898 (明治 31) 年 建設

生ルックに変化し（前掲256頁）、さらに昭和期に入るとセーラー服に変わっていった。中高生のセーラー服は1920年代にルーツがあると言われるが、青山女学院もその一つだったのである。今回展示のセーラー服は、1938年から1941年まで用いられた青山学院高等女学部の制服（冬服）で、学院カラーのグリーンが採用されている。「生徒たちは勝手に上着を短くしたりスカートを長くして当時の流行型に直したが、服装検査の時にはたちまちその網にかか」ったそうで、今も昔も変わらない女子高生気質がうかがえる（前掲405頁）。セーラー服は生徒たちの誇りで、戦時下で制服を誂えることが困難となってからも、上級生から借りたりお下がりをもらったりして大切に着たという。



青山女学院運動会 おそらく明治期



青山女学院代官山校舎 1922（大正11）年一部完成



青山女学院避難訓練 大正期



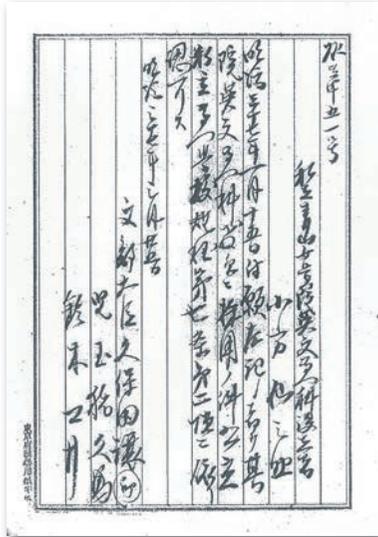
高等女学部生（昭和7年制定の夏服） 1939（昭和14）年



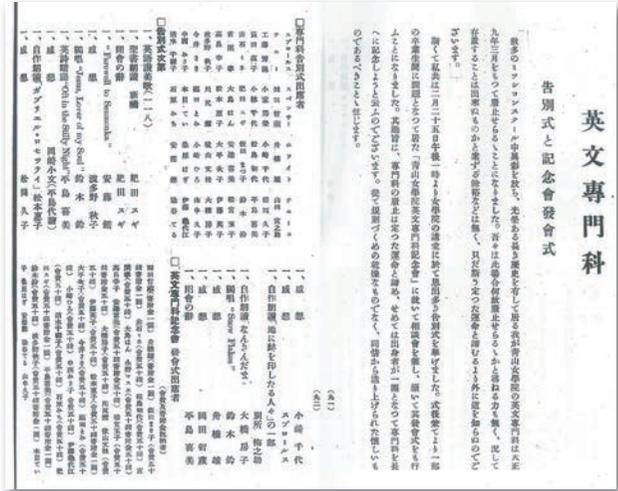
青山女学院代官山新校舎献堂式 1922（大正11）年

# Ⅲ 女子教育の拡大

## 英文専門科



青山女学院英文専門科が専門学校に認可される1904（明治37）年



英文専門科本科廃止1920（大正9）年 校友会会報23号での嘆き（特集号より）

## 関東大震災 1923



関東大震災後、青山女学院生徒が作った慰問袋 1923（大正12）年頃



関東大震災後、Leonora Seeds 宣教師と孤児たち

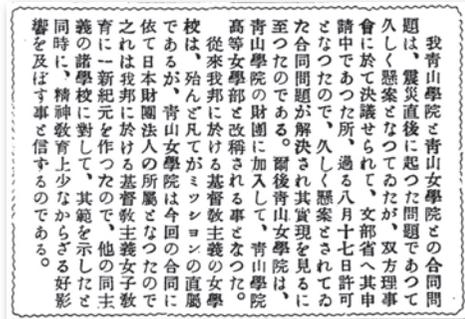


青山女学院体育館に保護した孤児たち 1923（大正12）年頃

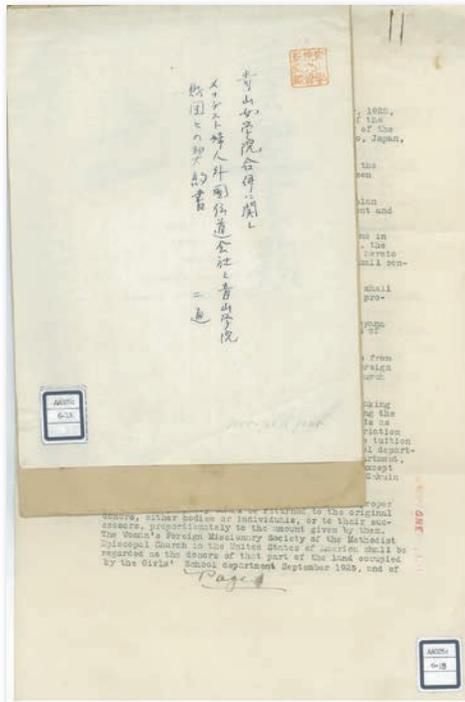


関東大震災後のテント教室 1924（大正13）年頃

## 青山学院との合同 1927



青山学院と青山女学院との合同（青山学報 57号）1927（昭和2）年



合同に関する契約書 1925（大正14）年

## 制服姿の生徒たち



バーバラ・ベイレー先生と制服を着た生徒たち 1934年頃



登校する制服姿の生徒たち 女子部正門 1939年



登校する制服姿の生徒たち 女子部正門 1939年

# IV 戦争と青山学院の女子教育

## 戦時下の教育

小林 瑞乃（現代教養学科日本専攻 准教授）

1940（昭和 15）年スプロールズが離任帰米した女子専門部の部長となった古坂崑城（青山学院専門部高等商業学部長兼任）は、経済的基盤強化のため 1941（昭和 16）年英文専攻部門を開設することとし、従来の家政科（修業年限 3 年、入学定員 80 名）に加えて文科（同 40 名）を増設し、家事専修科（修業年限 1 年、定員 60 名）を付設する許可を得た。

しかし日本は戦争へと突き進み、日米関係緊迫化によって同年 2 月米国メソジスト教会からの帰還命令によって青山学院在勤宣教師は帰国していった。同年 8 月、文部省の指令により、青山学院院長を本部隊長とする「青山学院報国隊」が組織され「女子専門部は第四ヶ中隊及び特別中隊より成る一ヶ中隊を形成」することとなった。同年 12 月 8 日、日本はハワイ真珠湾を攻撃しアジア・太平洋戦争が始まった。

こうした状況の中、女子専門部は文科の学科課程を変更して国語・国文学を中心とする文科第一類を開設し、英語・英文学を中心とする従来の課程は募集を停止し、文科第二類として在学生の卒業するまで暫定的に存置することとした。これは「文科（国語科）」として申請認可され、1943（昭和 18）年度から発足し、翌 1944（昭和 19）年度には家事専修科を実務科に改組し、戦時下の学科編成は、文科（国語科）〔修業年限 3 年、入学定員 40 名〕・家政科（保健科）〔同 70 名〕・実務科〔同 1 年、100 名〕となった。

1936（昭和 11）年高等女学部の学則第二条を改正し、次のように「教育勅語ノ御趣旨」を筆頭に掲げるようになった。

「本高等女学部ハ教育勅語ノ御趣旨ニ基キ、女子ニ須要ナル教育ヲ授ケ、基督教主義ニ拠リ、人格ノ発達ヲ計リ家庭及社会ニ有用ナル淑女ヲ養成スルヲ以テ目的トス」

国体に反するという理由でキリスト教主義学校に圧力がかかり、女子専門部でも宮城遙拝や教育勅語奉読を加え、この後に礼拝を行った。さらに、国家の圧力は強まり、1942（昭和 17）年建学の精神のより所である「寄附行為」を改正しキリスト教主義を後退させる状況に追い込まれ、第二条を次のように変更した。



報国団結の辞 1941（昭和 16）年



報国団結成式 1941（昭和 16）年



防空壕掘り 1943（昭和 18）年 5 月か 6 月



報国隊の腕章をつけた生徒の写真 1945（昭和 20）年頃

「青山学院ハ教育勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ皇国ノ負荷ニ任スヘキ人物ヲ鍊成シ基督教信仰ヲ採リテ之ヲ陶冶ヲ計リ、ソノ大綱ハ日本基督教団ノホストコロニ抛ル。」

1944年1月「緊急学徒勤労動員方策要綱」により学徒動員が本格化し、2月の「決戦非常措置要綱」、8月の「国家総動員法」にもとづく「学徒勤労令」によって「勤労即教育タラシムル」こととなった。青山学院女子専門部の生徒も、横川電機製作所・北辰電機製作所・田中精機工業などに動員された。同年9月、専門部三年、四年生(41年、42年度入学者)は繰上げ卒業となり、これが専門部最後の卒業式となった。

1945年3月10日の東京大空襲で町は焼き尽くされ、3月18日「決戦教育措置要綱」により「全学徒ヲ食糧増産、軍需生産、防空防衛、重要研究ソノ他直接決戦ニ緊要ナル業務ニ総動員」するため授業停止となり、学校機能は完全に停止した。

この年5月25日の夜、麴町・四谷・赤坂・麻布から新宿・渋谷・目黒・世田谷・中野・杉並に及ぶ大空襲によって青山学院は木造建築を焼失し、女子専門部、初等部、幼稚園はその校舎を失った。鉄筋コンクリートの建物のうち中等部校舎(現大学二号館)は内部焼失し、女子部講堂(プラット記念講堂)も内部を焼失して外壁を残すだけとなった。この戦火によって、青山学院は建物の約七割を失うほどの被害を被った。

焼夷弾が落とされ校庭が炎の海となる中、女子寮寮監・寮生は大学(現大学一号館)の校舎に避難し恐怖の一夜を過ごしたという。一夜明けると見渡す限りの焼け野原であった。

8月6日広島、8月9日には長崎に原子爆弾が投下され、8月14日ポツダム宣言を受諾し8月15日、日本は焦土の中で敗戦を迎えた。筆舌に尽くしがた戦争の時代は終わり、試練に耐えた青山学院は新たな歩みを踏み出すのであった。



女子専門部勤労報団として出動



戦災を受けたプラット記念講堂 1945(昭和20)年8月



青山学院平面図 戦災被害図 1945(昭和20)年

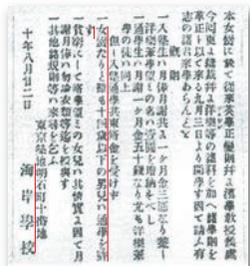


## 注目ポイント

「男子も入学できました!」

「女学生の憧れの制服 実は裏なんです…」

### 生徒募集広告（海岸女学校）



築地に開校した海岸女学校は、当初は女子だけでは生徒が集まらないと考えたためか、朝野新聞に「海岸学校」の校名で「女校たりといえども14歳以下の男児は通学を許す」という募集広告を出した。

### 高等女学部制服について

寄贈者は1936(昭和11)年入学・1941(昭和16)年卒業の磯野恭子氏。この制服は3年生の時に新調し、1年半後の4年生の春休みに裏返し(ポケットは裏返すと反対になるため古い口を塞いでいる)、袖口は別布を継ぎ、生地が薄くなったところはあて布をしてミシンのステッチで補強するなどして卒業するまで着用した。戦時という物資が不足している時代の、ものを大事にしている工夫が見て取れる。

高等女学部生には誇りある制服であり、女子にも男子にも憧れの的であったといわれている。

「関東大震災が起きなかったら、代官山に青山女学院大学が出来ていた!？」

「これぞ超絶技巧!」

### 代官山校舎

「東京英和女学校」(後に「青山女学院」と改称)は、1888(明治21)年に40年の期限付きで、「東京英和学校」(後に「青山学院」と改称)の土地の一部を借りて開校した(現青山キャンパスの高等部付近一帯)。最終的に、代官山に新校地を決定。1922(大正11)年には校舎の一部が完成し、新校舎で全生徒が勉強できることを心待ちにしていた矢先の1923(大正12)年9月1日、関東大震災が発生し新校舎は壊滅状態となった。これを機に「青山女学院」は「青山学院」に合同することとなった。

この代官山校舎の跡地には関東大震災後、同潤会アパートが建設され、現在は代官山アドレスとなっているが、もしもこの大震災が起きなかったら、「青山女学院大学」のような学校が存在していたかもしれない。

### 鷺の刺繍画

1916(大正5)年、米国のメソジスト監督教会から日本・朝鮮の伝道に派遣されたHerbert Welch 監督は、青山学院財団法人理事としても尽力した。この刺繍画は、監督が1928(昭和3)年その任を終えて帰米の際、1890(明治23)年に設置された海岸女学校手芸教室にルーツをもつ青山学院高等女学部の生徒が、感謝のしるしとして制作し贈ったものである。そして35年後の1963(昭和38)年に、監督本人から青山学院へ記念品として返還寄贈され「里帰り」した。

生徒たちの作品は技術的な評価が非常に高かったが、この作品もそれを裏付ける見事な作品である。